The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	同期型・非同期型併用による上級日本語教育の実践 : 学部留学生を対象とした「総合日本語」の授業の振り返りから
Author(s)	福良, 直子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2021, 25, p. 47-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79102
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

同期型・非同期型併用による上級日本語教育の実践

──学部留学生を対象とした「総合日本語」の授業の振り返りから──

福良　直子*

要　旨

本稿は、学部留学生を対象としたオンライン授業に対する学生のコメントをもとに、同期型（リアルタイム型）・非同期型（オンデマンド型）併用による上級日本語教育の試みを検証するものである。(1) 授業の負担度 (2) 併用型に対する意見 (3) 授業を通しての学び、以上3点についてアンケート調査を行った。その結果、学生は同期型・非同期型それぞれに学習の意義を見出していることがわかった。その一方で、学生が授業外でサポートし合えるネットワークの構築や課題の調整など留意点も明らかとなり、オンラインによる日本語の授業デザインに対する示唆が得られた。

【キーワード】オンライン授業、同期型、非同期型、上級日本語、学部留学生

1　はじめに

大阪大学では、COVID-19の感染拡大により、2020年度春夏学期は、すべての授業がメディア授業（オンライン）で実施された。

本稿の目的は、日本語が上級レベルの学部留学生を対象としたオンライン授業に対する学生のコメントを分析することにより、オンライン授業の一形式である同期型（リアルタイム型）と非同期型（オンデマンド型）の併用による、上級日本語教育の実践を検証することである。

藤本（2020）では、コロナ禍において、日本語教師が感じているオンライン授業の問題点がアンケート調査により明らかにされている。教師は、ほぼすべてのレベルや学習内容に問題を感じていることが示唆された。「今回の授業のオンライン化は、コロナ禍という緊急事態に際し、対面授業の代替え、そして暫定的な処置として行われた」ため「教師にとっても学習者にとっても、前提とニーズの違いによるマイナス印象スタートだった」（p.352）と述べられている。

今後は、このようなコロナ禍におけるオンライン授業での教育実践研究の蓄積がなされていくものと思われる。本稿は、オンラインでの日本語の授業デザインに対する示唆を得るべく、授業に対する学生の声にもとづき、併用型授業の検証を行うことで、留意すべき点や課題を明らかにしようとするものである。

大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部のホームページ[1)]では、2020年度以降に開講されているオンライン授業の事例が紹介されており、授業形式をリアルタイム型とオンデマンド型に分けて以下のように分類している。

【リアルタイム型】
スライド講義：音声入りスライド（教員映像なし）を配信
動画講義：動画（教員映像あり）を配信
【オンデマンド型】
テキスト講義：講義資料（音声や動画はない）を配信
スライド講義：音声入りスライドや映像（教員映像なし）を配信
動画講義：動画（教員映像あり）を配信

*　大阪大学国際教育交流センター特任講師

本稿では、リアルタイム型を同期型、オンデマンド型を非同期型と呼ぶ。対象とする授業は、Web会議ツールZoomによる同期型と講義資料の配布、レポートの回収等ができる大阪大学授業支援システムCLE（Collaboration and Learning Environment）による、非同期型（テキスト講義）を併用した。

2　授業の概要

以下、授業期間、受講者、授業の目的および内容について述べる。

2-1　授業期間

本授業は、学部1、2年生を主たる対象とした共通教育の授業で、2020年春夏学期（4月～8月）に実施した。4月8日の緊急事態宣言の発令により、当初の予定より2週間遅れて4月23日からの授業開始となった。

序盤は非同期型を多くし、中盤から終盤にかけて同期型の授業を増やした。4月に学内の全授業オンライン実施が決定されたため、学生の負担を考慮し、自分の都合の良い時間に課題に取り組める非同期型から始めることとした。

2-2　受講者

本授業には20名の登録があったが、授業に継続して出席していたのは、17名であった。主に学部の1年生が履修し、2～4年生も若干名含まれている。学生の専門分野は、文系、理系問わず多岐にわたり、国籍も多様である。

日本語が上級レベル対象の授業で、JLPTのN1およびN2合格相当の学生が混在するクラスである。

2-3　授業の目的

本授業は、学術的な日本語を理解・使用するための基礎的な日本語力および論理的・批判的思考力の涵養を主な目的としている。新聞記事やニュース番組などを活用しながら、さまざまな社会問題について理解を深め、ディスカッションやグループ発表、レポート執筆などを行った。具体的な授業内容については、次節で述べる。

21世紀に求められる資質・能力について、国立教育政策研究所教育課程研究センター（編）（2013）は、「今日的に育成すべき人間像を巡って、断片化された知識や技能ではなく、人間の全体的な能力をコンピテンシー（competency）として定義し、それをもとに目標を設定し、政策をデザインする動きが広がっている[2)]」として、諸外国の教育改革における資質・能力目標を挙げている。その上で「どの目標も、言語や数、情報を扱う基礎的なリテラシーと、思考力や学び方の学びを中心とする高次認知スキル、社会や他者との関係やその中での自律に関わる社会スキルの3層に大別できる[3)]」と共通点を指摘している（pp.13-14）。

論理的思考力や批判的思考力は、高次認知スキルの一つに位置付けられ、21世紀に求められる資質・能力を構成するものである。本授業は、日本語学習を通して、上記の社会スキルにつながる、基礎的なリテラシーおよび高次認知スキルの醸成を目指したものと言える。

2-4　授業内容

学期期間の序盤から中盤では、非同期型において新聞記事の読解やニュース動画などの視聴を通して、主にコロナ禍における生活や価値観の変化について考えた。学生が提出するワークシートは、記事や動画の内容、表現、漢字の読み方の確認に加え、内容に関する自身の意見や考えを書くものとなっている。

具体的には、「ステイホーム」における「巣ごもり消費」や政府による「Go toキャンペーン」、「接触確認アプリ」、観光業の新しい潮流である「マイクロツーリズム」などに関するものを扱った。学生自身および自国の生活や価値観の変化、コロナ禍を乗り切るための各分野の取り組みなどについて文章を書き、フィードバックを行った。

中盤から終盤にかけては、同期型において上記の非同期型での学習に基づいたディスカッションや学生の個人発表を実施した。終盤の非同期型では、全米に広がった人種差別への抗議デモに関連した新聞記事を取り上げた。差別を含め、偏った見方を助長する恐れがある「ステレオタイプ」について「異なる視点から意見を述べる」、「互いの捉え方の違いを理解する」ことを目標として個人発表を行った[4)]。発表の際には、事前のレジュメ提出を課した。

個人発表で学生が取り上げたトピックは、映画やドラマで描かれる人種別のステレオタイプや韓国の兵役免除者に対する差別から男らしさについて論じたものや、自国における欧米偏重主義、髪色（金髪）

に対する偏見、老人に対する差別など、多岐にわたっていた。

個人発表後には、教師やクラスメートからのフィードバックを反映させて、レポート作成を行った。

3　アンケートの結果と考察

アンケートは授業の最終日に実施し、質問項目は(1) 授業の負担度、(2) 併用型に対する意見、(3) 授業を通しての学び、の３点についてである。アンケートの回答総数は14名分であった。以下、質問項目ごとに学生のコメントを分析する。なお、学生のコメントは基本的に原文のまま掲載しているが、理解に誤解を生じると思われる表現については、※で適宜修正した。アンケートは教育・研究上活用する旨、該当する受講者からの許可を得ている。

3-1　授業の負担度

一点目の質問は、以下の通りである。

「この授業の課題や準備のために、平均してどのくらい時間がかかりましたか。他のオンラインの授業と比べて、どうでしたか。(例：負担が大きすぎた、もっと課題が多くてもよい、など)」

課題や準備については、「適切、ちょうどいい」と回答した学生が９名、「少し多い」が１名、「少ない、もっと多くてもよい」が４名であった。

「適切、ちょうどいい」という回答で具体的な時間を記していた学生のうち６名が「平均１時間から１時間半かかる」と述べていた。「適切、ちょうどいい」との回答の中には、「平均３時間くらいかかるので、ちょうどいいと思います」という学生もいた。同じ３時間でも「少し多い」と回答した学生もおり、適切だと考える課題の量やその負担感にはかなりの個人差がみられた。

対面授業では、教員は各学生が課題に取り組む様子を観察し、時間や負担を直接確認しながら、課題の量などを調整できるが、非同期型の授業ではそれが難しいため、フィードバックをして学生の反応をみながら、課題の質と量を調整した。「最初は少し時間がかかったが（2時間)、後ろではちょうど良いと思われる量に調整されたと思う」というコメントからもその様子がうかがえる。

尹・岩崎・鄭（2016）では、反転授業型オンライン日本語コースの課題として、「反転授業型実践を成功させるためには、教授活動だけではなく、学習者の自律学習を促す支援と働きが必要となる」(p.62) との指摘がある。

以上より、非同期型では、必須課題に加え選択課題を用意するなど、学生が自身で学習量を選択し、調整することができる方法を検討する必要があると考えられる。

3-2　併用型に対する意見

二点目の質問は、以下の通りである。

「今回、課題提出での授業とZoomでの授業を組み合わせましたが、いかがでしたか。授業を振り返って、率直に意見を書いてください」

14名中６名が、併用型に対して概ね好意的な意見であり、２名が対面授業と比較し、同期型の良さを指摘していた（以下、下線部は筆者による)。

3-2-1　併用型による学習の意義

以下のコメントでは、同期型、非同期型それぞれの学習の意義が述べられている。

「課題提出とZoomの組み合わせはこの授業だけなので、自分でしっかり学習、準備したうえで先生と話すことで得られた知識がよりしっくりくるところがとてもよかったと感じました」

「個人的には、やはり対面授業がいいと思いましたが、本講義のオンライン授業は、まず課題で日本語の実力を試し、Zoom授業でCOVID-19やステレオタイプについて議論して、レポートを書くという流れがいいと感じました」

これらのコメントでは、学生が非同期型での学習を「自分でしっかり学習、準備する」、「課題で日本語の実力を試す」ものと捉え、その後の同期型での学習を「先生と話すことで得られた知識がよりしっくりくるところがとてもよかった」「議論してレポートを書くという流れがいい」と捉えている。

授業の目的は教師から説明がなされているが、このように学生は、自身の学習を振り返り、同期型と非同期型の学習の関連を自分で解釈し、それぞれに意義を見出していたと言える。

以下のコメントでは、同期型と非同期型での学習を通した自身の成長について述べられていた。

「はじめは、オンライン授業だとちゃんと得るものがあるのか心配でしたが、とても充実して役に立った授業でした。実生活と関連した問題についての文を読んで、単語も勉強して、私の意見も日本語で書いて、自信感と日本語能力がかなり向上したと感じています。またお互いに意見を交わすこともたくさんしたのでそんな面でも成長したと思います」

初めはオンライン授業に対して不安を感じていた学生が、非同期型では、日本語を読み、書く活動を通して学ぶことで自信を持ち、日本語能力の向上を感じたと述べている。さらに、同期型で議論をする経験を重ねたことによっても自身の成長を感じ、併用型によるオンライン授業を「充実して役に立った授業」であると評価していた。

3-2-2　同期型授業に対して

以下のコメントでは、同期型を対面授業と比較し、肯定的な評価がなされていた。

「みんなの声を聞くことができ、先生とも顔合わせで話をすることができてすごくよかったと思う。ネットの授業だったが、教室で授業をしているかのような気もした」

「オンライン授業の経験がいいと思いました。Zoomでのオンライン授業は対面授業の最も近い方法であると思います」

このように、同期型授業を「教室で授業をしているかのよう」「対面授業の最も近い方法」と肯定的に評価する声がある一方で、以下のような指摘もみられた。

「今期の授業を振り向けば（※振り返れば）、やはりみんなカメラをオンにする方がよいと思います」

Zoomによる同期型授業では、学生にカメラをオンにするよう強制はできないが、本授業では可能であれば、顔を出して参加するよう促していた。しかし、カメラ等の機器がない学生もおり、常に顔が見える状態で参加する学生は限られていたため、上記のような指摘がなされたと推測される。

教師がブレイクアウトルーム[5)]でのグループ活動の詳細を限られた時間で把握することは困難であるため、本授業では、話し合った内容の発表、あるいは授業後の提出を指示していた。それらの成果物をみる限り、グループでの話し合いは問題なく行われていたと言えるが、今後は、機器などに支障がない場合は、グループ活動ではできる限り互いに顔を見せて話すようにするなど、学生と共にクラスとしての原則を決めるという可能性も考えられる。

3-2-3　併用型による心理的負担

以下のコメントでは、併用型により、学生の心理的な負担が軽減されたことがうかがえる。

「毎週Zoomで行われるわけではなかったので、余裕を持って参加することができた。個人的には良かったと思う」

「課題提出とZoomでの授業がバランス良く取れていると思います。本来なら全部学校に行って受講しなければならないが、オンラインではこういう手間もなくなったので、なんの文句もありません」

その一方で、以下のように併用型に対して慣れなかった、というコメントもみられた。

「私の場合は、Zoomを使った授業がこの授業しかなかったので、木曜に授業があるということを忘れがちでした。また、ネット状態によりよく聞こえないこともあって、個人的には少し不便でした」

「学期前半で課題提出での授業に慣れているから、突然Zoom授業に入るのは少し慣れていないと思います」

学生には毎回CLEを通して連絡するようにしていたが、上記のような問題は、学生間で連絡を取り合い、情報を共有し確認できるような関係が築けていれば、解消されるものと考えられる。

昨年度の対面授業の場合は、授業前後の会話や学生同士による連絡先の交換などによって、学生間のネットワークが構築されており、教員側も学生のクラスでの人間関係をある程度把握することができていた。

しかし、全授業がオンライン実施となった今回で

は、学生間で互いにサポートし合えるような関係構築が困難であったと推測される。同期型授業の際には、教員が率先して、学生間のネットワーク構築を促すような活動を取り入れる必要があることが示唆された。

3-3　授業を通しての学び

三点目の質問は、以下の通りである。

「授業では、主に、コロナ禍で変化した私たちの生活や価値観について考えたり、あらゆるプロトタイプを他の視点から見直す試みをしたりしました。皆さんにとって、この授業での「学び」には、どんなものがありましたか。できるだけ具体的に書いてください。」

本授業での学びとして、日本語力の向上に加え、表現はそれぞれ異なるが14名中11名が視野の広がりに言及していた[6)]。具体的には、以下の通りである。

「コロナ禍に関するニュースを見ることにより、日本の観点からのコロナ禍についてわかる（※理解する）ことができて良かった。新聞を読んで取り組む課題でも日本の新聞を読むことに慣れるようにしてくれたと思う。また、皆の発表を聞く授業では色んな国の話や皆が持っている価値観について知ることができて楽しかった。世の中には多様な考え方が存在し、どれが正解なのかは決まっていないことを感じた。この授業によって、以前より視野が広げた（※広がった）と思う。」

「総合日本語の授業なら、学ぶことの一つはやはり日本語の語学力だと思います。日本語を読むと聞く能力が上達しました。さらに、コロナ中の日本の現状をしっかり見ました。最後は、前と違う視点から世界を見ることができました。」

「日本語のニュースを見たり、日本語の記事を読んだりして問題を解いたり、思考を拡張させたり、意見交換すること。自分の意見を述べ、みんなと話すことで視野を広げること。」

「この授業を通じて、私はコロナ禍の下の日本社会の変化を勉強しただけではなく、偏見やステレオタイプを持たずに客観的に物事を見ることが重要だということを学びました。他には、授業に参加した学生の皆さんが発見したステレオタイプを聞き、私の他の国に対する理解も高まり（※深まり）ました。」

「自分は正直言うと、コロナでそこまで生活が一変したというような感じはなく、あまり気にかけてはいなかったが、授業を通して知った、コロナによってもたらされた生活の表の変化だけでなく、人の内的な変化もこれだけ変わっているということにとても興味を持つようになりました。」

上記５点のコメントからは、日本の新聞を読むことに慣れた、日本語の読解力と聴解力が上達した、など「日本語力の向上」に加え、コロナ禍について日本の観点から理解することができた、日本の現状をしっかりと見た、人の内的な変化に興味を持った、など日本社会および他国に対する理解が深まったことによる「視野や関心の広がり」が学びとして捉えられていることがわかる。

下記のコメントでは、これらの学びをいかに応用し、活用していくかという点が指摘されている。

「最終レポートにも書いておきましたが、何かについて「きちんと知る」のが大事であることが、この授業での「学び」だと思います。そうすると、急速な変化に対処することもうまくできるし、ステレオタイプや偏見に陥ることも避けられると思います。」

「ステレオタイプについてのみなさんのシェアからいろんな知識を身につきました。グローバルな考え方はまさにこのような知識の積み重ねから育たれると思いますので、大変勉強になりました。」

「中国の一つのことわざを思いついた、「患難見真情」。意味は「苦境にあるときに真情がわかる．困難に遭って始めて真の友を知る」。この授業は、「学び」より、一つの土台を作った感じだ。他人たちの厳しい言いにくい意見でも、率直に聞ける土台を作ってくれた気がする。それは、災害や苦境に面する時、交流を保って、心の支えになると思う。」

知識の習得により、急速な社会変化への対処が可能になり、偏見に陥ることを回避できる、グローバルな考え方の育成につながるなど、学びをいかに活用し次の行動へつなげるか、自身の学習がメタ的に

捉えられ、言語化されていると言える。また、最後のコメントでは、他人の意見を率直に聞ける「土台」を作ってくれた、と述べられていた。その「土台」は災害や苦境に直面した際「交流を保って、心の支えになる」と記されている。

先述したように、本授業では、日本語学習を通して、社会や他者との関係やその中での自律に関わる「社会スキル」につながる、「基礎的なリテラシー」および「高次認知スキル」の醸成を目指した。

学期末のアンケートという限られた資料からではあるが、世界中がコロナ禍という苦境に直面している現在、学びが築いた「土台」が、学生たちの心の支えになっているのであれば、本授業の目的は十分に達成されたものと言えるだろう。

4　おわりに

本稿では、併用型授業に対する学生のコメントから、上級日本語教育の実践を検証した。非同期型では、学生の負担の考慮や自律的な学習促進の観点から、必須課題に加え選択課題を示すなど、学生自身が学習量を調整できるような工夫が必要であることが示唆された。また、同期型授業の際には、教員が率先して学生間のネットワーク構築を促進する活動を取り入れる必要があることが示された。

学生は同期型、非同期型それぞれに学習の意義を見出し、日本語力の向上や理解の深化による視野の広がり、自身の成長を本授業の学びとして捉えていたことがわかった。

今後は、得られた示唆をもとに、上級レベルにおけるオンラインでの授業デザインの改善を目指したい。

注

1）大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部 https://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/

2）松尾（2017）は、コンピテンシー重視の教育のあり方についてさまざまな議論があるとした上で、「グローバル人材としての人的資源を開発する教育に矮小化される危険性」と「人間の全体的能力を育成する教育を開く可能性」を持つと指摘している（pp.19-20）。そして、このような両義性を十分に認識した上で、全人教育の視点から「グローバル市民を育成するための新しい学びが求められている」と述べている（p.20）。

3）国立教育政策研究所教育課程研究センター（編）（2013）では「「認知」や「社会」と連続する際、最も一般的な用語の「スキル」を用いた」と述べられている。

4）荻原稚佳子・齊藤眞理子・伊藤とく美（2019）『日本語超級話者へのかけはし　きちんと伝える技術と表現』（第9刷）第7課「ステレオタイプを打ち破ろう」（スリーエーネットワーク）を参考にした。

5）ブレイクアウトルームとは、Zoomミーティングを複数のルームに分割できる機能で、参加者は画面共有などが可能であり、グループ活動時などに使用できる。

6）他のコメントでは、「コロナの影響で日本人に焦点を当てて観光業を復興させようという動きがあること、大阪モデルは特に他の自治体のモデルになっているということ」「コロナ禍を中心に、この状況から生じる諸問題、政府からの対策も学びました」など具体的な学習内容が挙げられていた。

参考文献

奥西有里・谷口弘一（2019）「21世紀に求められる資質・能力とPISA調査による測定――PISA2018グローバル・コンピテンスの概念と測定を中心として――」『岡山理科大学紀要』第55号，pp.129-136

国立教育政策研究所教育課程研究センター（編）（2013）『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5　社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理』国立教育政策研究所

藤本かおる（2019）「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究――担当教師へのインタビューを中心に――」日本e-Learning学会誌，19巻，pp.27-41

藤本かおる（2020）「コロナ禍における授業のオンライン化に関する日本語教師の取り組み――オンライン授業の実践に関する教師へのアンケートから――」『2020年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.348-353

松尾知明（2017）「21世紀に求められるコンピテンシーと国内外の教育課程改革」国立教育政策研究所紀要第146集，pp.9-22

村上正行・佐藤浩章・大山牧子・権藤千恵・浦田悠・根岸千悠・浦西友樹・竹村治雄（2020）「大阪大学におけるメディア授業実施に関する全学的な支援体制の整備と新入生支援の取り組み」『教育システム情報学会誌』37巻4号，pp. 276-285

尹智鉉・岩崎浩与司・鄭良媛（2016）「反転授業型オンライン日本語コースにおける初級日本語学習者向けの遠隔チュートリアル」『早稲田日本語教育実践研究』第4号，pp.61-62

・資料

以下に、非同期型授業における指示や課題として、第１回～第３回のものを示す。

〈今後の授業の進め方〉

シラバスには、「グループディスカッションを行う」と書いていますが、このような状況ではなかなか難しいので、しばらくは、以下のような流れで授業を進めていきたいと思います。

1．CLEで出された課題に各自取り組む。
2．締め切りまでに提出する。
3．次回の授業では、課題で書かれた皆さんの意見をCLEで共有し、教員からフィードバックを行う。
4．適宜、質問などを受けつける。

授業がすべてメディア授業になり、課題の締め切りが重なるなど大変だと思いますが、各自しっかりと時間管理をして、勉学に取り組んでほしいと思います。

〈第１回　課題〉

第１回目の課題は、以下の３つです。

1．アンケート　※添付のファイルを見てください。
2．自己紹介
会うことができないクラスメートに、自分のことがよく伝わるように、印象に残る自己紹介を工夫して書いてください。次回、クラスで共有します。（400字程度書きましょう）
3．今、皆さんと共有したいこと
COVID-19で日本中、世界中が大変なことになっています。外出自粛など、皆さんの生活も大きく変わり、不安に思っていることも多いと思います。皆さんの今の気持ちや、日々の生活で困っていること、気を付けていること、心身ともに健康に過ごすために工夫していることなど、今、皆さんと共有したいことを何でもいいので、自由に書いてください。一言でもいいです。字数は問いません。クラスメートや先生とおしゃべりする気持ちで書いてください。
皆さん、手洗い、うがいをしっかりとして、元気に毎日を過ごしてくださいね！

〈第２回　課題〉

1．動画（日経新聞「朝刊一面を読もう　動画で振り返るステイホームのインパクト」）を視聴して、以下の問いに答えなさい。

(1) なぜ、エンゲル係数が増えているのか。
(2) 食品では、どのような物がよく売れているか。３つ書きなさい。
(3) 食品の他には、どのような商品がよく売れているか。投資家の間では、どのような企業を評価する動きが広がっているか。
(4)「９月入学」を決定するためには、どのようなことが必要か。

2．動画で紹介されている記事「居間の間仕切り23倍「ステイホーム」の売れ筋」を読んで、以下の問いに答えなさい。

(1) 下線部の漢字の読み方を書きなさい。
1．個人消費は大きく縮んだ。
2．改めて注目された売れ筋を探った。
3．自ら筆を執った。
4．「宴会芸も熱心に取り組め」と説く。
5．自宅での「おしゃれ」を先駆的に訴えた08年発売のブランド
6．日陰者が脚光を浴びる。
7．伏兵は、園芸用の噴霧器（ふんむき）だ。
8．今後の糧になるはずだ。

(2)「巣ごもり消費」とは、どういう意味か。

(3) 以下の商品は、それぞれどのような理由で売り上げが増えているのか。簡潔に書きなさい。
1．「入社１年目の教科書」⇒
2．「ジェラードピケ」の部屋着　⇒
3．「間仕切り（まじきり）」⇒
4．「サーキュレーター」⇒
5．園芸用の噴霧器　⇒
6．リバーシ、トランプ、花札（はなふだ）⇒
（※中略）

(4) 動画では、現在の新型コロナウィルス禍は「慣習や価値観を見直す絶好のチャンス」であると述べられていました。みなさんの国でも、これまで

の慣習や価値観が見直され、議論されているのではないでしょうか。また、みなさん個人の価値観も変化していることと思います。国の例でも、みなさん個人のことでもいいので、新型コロナウィルスの影響による、慣習や価値観の変化について、以下で説明してください。字数は問いませんが、200字程度を目安に書いてください。

〈第３回　課題〉

(1) 前回（第２回）の課題の解答のファイルを見て、自分でチェックしてください。

(2)「総合日本語　第３回　皆さんからのコメント」のファイルには、前回の課題として皆さんに書いてもらった「新型コロナウィルスの影響による、慣習や価値観の変化」についての作文があります。

①まず、自分の書いた作文のチェックされている箇所を確認し、これから気をつけたい点を簡潔にまとめてください。

②次に、全員分の作文を読んでください。

③皆さん全員の作文の内容を表す、キーワードを５つ以上書いてください。例えば、(1) と (2) の作文は共通して、「衛生」についての内容ですね。このように、共通したキーワードを挙げてもいいですし、それぞれの作文のキーワードを一つずつ挙げてもいいです。

④最も印象に残った作文を一つ選んで、内容に対する質問とコメントを書いてください。

今回の課題は、以上です。がんばってくださいね！

―上記第３回課題で学生が挙げたキーワードの例（括弧内の数字は人数）

経済 (11)、オンライン授業 (10)、衛生 (10)、政治 (4)、配達 (3)、環境 (3)、価値観 (2)、グローバリゼーション (2)、コロナウィルス (2)、社会問題 (2)、政府の政策 (2)、マスク (2) など